

九月の蒲田教室 平成二十五年九月十一日

星野 史子

今月、教室に楽しき笑ひ聲満ちにけり。谷田貝先生の、英國模様の紙の倫敦土産、羅馬の土産話に歡聲あり。先生の羅馬訪問は、即興詩人の舞臺を實感さする解説となりけり。

「羅馬に往きしことある人はビアツァ・バルベリイニを知りたるべし。こは貝殻持てるトリイトンの神の像に造り倣したる、美しき噴井ある、大なる廣こうちの名なり。」こは『即興詩人』の冒頭文なり。今回先生訪れども、かの噴井は周圍を覆はれ工事中なりしとか。

西班牙廣場にては、ペッポと見紛ふ人との遭遇あり。これらを寫したる寫眞を拜見す。ペッポとは主人公アントニオの悪しきをぢなり。彼は生まれつき兩の足痿えたる人なれど、板の上にて體を乗せ、兩手もて歩くこといと巧なり。日ごとに西班牙磴の上に集まれる乞兒の親分なり。

私達「即興詩人を讀む會」も早一年十ヶ月が過ぎなんとす。アンデルセンの作品を森鷗外が邦譯せしこの作品は、雅文體と呼ぶる大變格調高き翻譯文の傑作とせられ、讀むにリズムよきものなり。鷗外獨特の漢字の讀ませ方多々あれば、讀みこなすこと我らにとり、いかばかりか困難ならむ。然れば、我豫習の爲、パソコンに原文入力せむと思ひたち、古き漢字を検索、確定、貼付け、送り假名をその都度舊假名遣ひに變換入力、讀むこと得ざる漢字にはルビ振る等の作業に追はれ、最初の一頁入力するに優に一時間を費やせり。更なる難行苦行を重ね、漸くに十頁程のデータをばUSBに保存せり。

その原稿を持ちて教室に参加したれば、多くの他生徒文語文を巧みに讀みたるを常とせるを、我も今回ばかりは豫習の効果ありて、まがりなりにも上手に讀むことを得たり。全員聲を揃へ朗讀するは大變樂しきことなり。これも鷗外の素晴らしき文體なればこそと思ひけるが、回を重ねること教室生徒皆の息の合ふが故とも思ひいたり。又時に橘由貴さんの朗讀の聲聞こゆるも格別なり。

『即興詩人』は長き物語なれど、皆で最後まで讀み終はらんと覺悟しをれば、さらに續きをば入力せんものと前のUSB探したれども、何處にも見當たらず、紛失せるものと諦らむるも、眞に全身より力抜けにけり。

然はあれど、又氣力ふるひ起こし、來月も楽しきお仲間逢ひて話の續きに聲を合せたと思ふこと切なれど、我が豫習の原文入力、いつになるかは未定なり。

## 森 鷗外譯「即興詩人」を朗讀す

加藤忠郎

愛甲次郎氏、學士會での講演「美しい日本語の繼承について」にて、文語文のいつまでも記憶に残るは、其が持つ言語エネルギーと音楽性が爲なり、と言へり。聖書の言葉のうち人口に膾炙せるもの皆文語なり。考ふるにこれ即ち言語エネルギーと音楽性のなせる業なり。

斯かる文語文の朗讀に興味があれば、文語の苑蒲田教室にて森 鷗外譯「即興詩人」の朗讀會を行ふと言ふを聞き、早速参加せり。即興詩人はアンデルセンの原作にて、森鷗外の翻譯になるが、文語文として見事なる名文なり。予の讀みし文語文は尠かれども、文語文の持つエネルギーと音楽性にと此程満ち溢れてゐるものを知らず。

教室にては、先づ師範の谷田貝常夫氏が、難しき漢字を解説せし後、一度朗讀し、その後参加者全員にて朗讀す。されど、やゝ困惑するは鷗外の獨特なる漢字の用ゐ方なり。夏目漱石がよく用ゐたる「五月蠅い」に類するものは面白く眞似て見たき思ひするも、通常良く用ゐる漢字の代りに見た事もなき漢字を用ゐるは讀者として些か閉口す。

昨年十一月、東洋大學にて、「文語の苑」主催の「森鷗外生誕百五十周年記念シンポジウム」があり。メインの講演にて谷田貝常夫氏がボイス・アーティスト橘由貴女史の朗讀を交へつゝ、「即興詩人」を解説し、その魅力に迫りたり。橘由貴女史も朗讀會のメンバーなり。文語の持つエネルギーには今更ながら再認識させらる。

主人公アントニオがサンタ夫人に言ひ寄らるゝ場面の朗讀は、女史の熱演の所爲もあり、文語の持つエネルギーが觀客の心を驚擱みし、下手なる通俗小説よりも遙かに艶つべき印象を觀客に與へたり。アントニオ、墮ち來る聖母の小扁額に救はるゝ最後の部分のみ紹介す。

妾が血を焚いて熱をなすものは何ぞ。妾を病ましめるものは何ぞ。妾は瘖めて何をか思へる。妾は寐て何をか夢見る。おん身の愛憐のみ。おんの接吻のみ。アントニオよ。妾が身を生けんも殺さんも、唯おん身の命のままなり。夫人はひしと我身を抱けり。一道の猛火は夫人の朱唇より出でて、我血に、我心に、我靈に燃えひろごりたり。彼時速し、此時遅し。はたと我頂を撃つものあり。嗚呼、功德無量なる聖母よ。こはおん身の像を寫せる小扁額にして、偶々劈頭より墮ち來りしなり。否、偶々墮ち來りしに非ず。聖母は我が慾海の波に沈み果てんを慰みて、ことさらに我を喚び醒まし給ひしなり。否々と叫びて、我は起ち上がりぬ。我渾身の血は涌き返る熔巖にも比べべし。アントニオよ、妾を殺せ、妾を殺せ、只だ妾を棄てゝ去りそと、夫人は叫べり。其臉、其眸、其瞻視、其形相、一として情慾に非ざるもの莫く、而も猶美しかりき。火もて畫き成せる天人の像とや謂ふべき。我身の内なる千萬條の神経は一時に震動せり。我は一語を出すこと能はずして、部屋を出で、階を下りぬ。恐ろしきものに逐はれたらん如く。

またアントニオが秘かに慕つてをりたる女性、今や死を前にしたるアヌンチャタがアントニオの許嫁マリアに託したる手紙の朗讀も觀客に素晴しき感動を與へたり。死の數日前に附け加へられし薄墨の後半の部分を紹介す。

苦を受くる月日も最早些子ちとを餘し候のみと存參候。今まで受けつるあらゆる快樂の聖母の御惠なると等しく、今まで受けつるあらゆる苦痛も亦聖母の御惠みと存參候。死は既に我胸に迫り候。血は我胸より漲りみなぎ流れ候。いま一回轉して漏刻の水は傾け盡され申すべく候。人の傳候ところによれば、エネチア第一の美人は君がいひなづけの妻となり居候由に候。私の死に臨みての願は、御二人の永く幸福を享け給はんことのみ候。あはれ、此數行の文字を托すべき人は、その人ならで又誰か有るべき。その人の私の請を容れて、ここに來給ふべきをば、何故か知らねど、牢く信じ居參候。生死の境に浮沈し居る此身の、一杯の清き水を求むべき手は、その人の手ならでとはと存參候。さらばさらば、アントニオの君よ。私の此土に在りての最後の祈禱、彼土に往きての最初の祈禱は、君が御上と、私の徒に願ひてえ果さず、その人の幸ありて成し遂げ給ふなる、君が偕老の契の上とに在るのみなることを、御承知下され度存參候。今更練言めき候へども、聖母の我等二人を一つにし給はざりしは、其故なからずやは。私は世人にもてはやされ讚め稱へられて、慢心を増長し居候ひぬれば、君にして當時私を娶り給ひなば、君の生涯は或は幸福を完うし給ふこと能はざりしにはあらずやと存參候。さらばさらば、アントニオの君よ。過ぎ去りしは苦痛、現然せるは安樂にして末期は今と存參候。アントニオの君よ。又マリアの君よ。私の爲に祈禱し給へかし。

アヌンチャタ

「即興詩人」のストーリーは小説としても中々に面白く、朗讀會にては話の進展を楽しみ乍ら參加してをりしが、此の日の講演にて終りの方まで話の筋が分つてしまひ、楽しみが一つ減りたる心地せり。されど朗讀會の方は最後まで行くには未だかなり時間が掛ると思はれ、當分の間、文語を學びながら、ストーリー展開が楽しめることこそ嬉しけれ。

(かとうただを)(公益財團法人日本發明振興協會・副理事長)